

教科書を教える 教科書で教える

東京都港区立赤坂中学校教諭
甲斐利恵子



Q

先日、「クジラたちの声」の授業を終えたときでした。ひとりの生徒が「一回読んでわかることを、なんでまた授業で繰り返しやるんだろ」と、つまらなさそうにつぶやきました。わたしは、ていねいに指導することで理解も深まり、生徒が自分では気づかなかったおもしろさもわかるだろうと思っています。

しかし、ベテランの先生に相談すると、「あなたの授業は『教科書を教える』ことであって、『教科書で教える』観点が抜けている。だから生徒もつまらなく感じるのだ」と言われました。教科書の内容をしっかり理解させるだけの授業ではいけないのでしょうか。

A

私も若いとき勉強会に行くたびに、「何が目標なのか」「どんな力をつけたいと考えているのか」と、何度も何度も先輩の先生方に聞かれました。なんでそんな細かいことを言うのか、この教科書の内容を理解させることが目標ではないのか、とその都度思っていました。

教師は、「何を」教え、「どんな力」を身につけさせたいかを考えて授業の組み立てを検討する必要があります。

まずは授業計画を形に

どんな授業にしようかと考えるとき、研究授業のときのような指導案を作る必要はありません。でも、指導案の項目にある「単元の目標」や「単元設定の理由」「教材観」は考えておくといいです。時数に合わせて

た計画も立てなければなりません。私は自分の授業用のノートにそれらの項目に関することを必ず書くことにしています（資料1）。メモ程度のことも多いのですが、「この教材で何を教えるのが一番いいか、それはなぜか」と考え、それに答えるようにしています。また、「どんな活動がいいか、それはなぜか」という

ことも考えます。考えたことに言葉を与えていく作業はとても重要です。このようなことを意識せずに、内容を吟味するための教材研究に入ってしまうと、何を教えるための授業なのかという核になる部分を欠いたまま授業を進めることになるのです。

この「クジラたちの声」という文章は、中学生で初めての説明文教材

目標やつけたい力に合わせた練習や活動を考える

この単元では、Q&Aの形式で、「クジラたちの声」のパンフレットを作る活動を設定しました。しかし、「文章の中に問いを見つけなさい」と指示しても、生徒たちは、たいていはどつすることか分からないはず。そこで究極の説明文といってもよい百科事典を使い、練習することにしました。

例えば、事典の説明をもとに、それが答えとなるような問いを立てる学習を考えました（次ページ資料2）。ほんの十分ぐらいの学習ですが、

■単元名 クジラたちの声
—説明文を読み、説明文を書く—

■単元設定の理由

- ・1年最初の説明文
- ・説明文とは何か？
- ・説明文を読み解く際に、「問い」の視点で読む
- ・説明文には筆者の立てた「問い」があるはず
- ・説明文を読んだことが、説明文を書くこと（表現）に生きる
- ・わかりやすい説明文を書こうということで定着を

■文章

- ・はっきりと見える「問い」もあるので、隠れた「問い」を見つけるにも都合がよい
- ・適度な長ささと内容の難易度
- ・映像的にもパンフレット向き

■流れ

▼第1部「クジラたちの声」を読む

①説明文とは何か？—問いと答え（練習）

②「クジラたちの声」を読む

(1)「問い」を見つけ出す

(2)パンフレットを作る（Q&Aの形で）

▼第2部 わかりやすい説明文を書こう

①何について説明するか

②「問い」を生かして、構成を考える

③文章を書く 製本（文集）400字で

④発表会・メッセージ

⑤学習のふりかえり

目標

◆文章の中に「問い」を見つける

◆「問い」を立てる

◆わかりやすい説明文を書く（「問い」を生かす）

資料1 「クジラたちの声」の授業ノート

15

14

